

## あとがき

李承律

周知のように、東京大學郭店楚簡研究會（第三卷から「古典學の再構築」東京大學郭店楚簡研究會に改稱）では、今から五年前の一九九九年から『郭店楚簡の思想史的研究』という雑誌を編集・発行してきた。それが昨年第六巻で停刊にならざるを得なかった理由は、同巻所収の「編集後記」に書いてある通りである。ところで、そこにはまた「一旦その幕を閉じた本誌が新たな息吹を吹き込まれ、再び讀者諸氏と相見える日が来ることを祈るものである。」と書いてあるが、本誌『出土文獻と秦楚文化』はまさにその表現通り新たな息吹を吹き込んで誕生したものにはほかならない。しかし、上海博楚簡研究會の發足や本誌の誕生は、現大東文化大學教授の池田知久先生の多大なるご盡力によるものであるという事実も、またここに記しておくべきであろう。

今回その編集の重責を私が擔當することになったが、本誌の編集に当たっては、いくつか乗り越えなければならないハードルがあった。

まず、雑誌のタイトルをどう決めればよいかの問題があった。雑誌は言うまでもなく一般の單行本とは違っていわゆる「逐次刊行物」であるため、タイトルが一旦決まれば、餘程の事が無い限りそれを後に變更することは難しく、望ましくもない。それゆえ、編集會議のときはタイトルの問題が最も長く討論の對象となった。そうして今の『出土文獻と秦楚文化』というタイトルになったわけであるが、このように決めたのは次のような理由によってである。つまり、前回の『郭店楚簡の思想史的研究』の場合は、「郭店楚簡」・「思想史」のように、ある出土文獻や研究分野を特定するタイトルとなっている。そのため、恐らく郭店楚簡以外の出土文獻や思想史以外の研究分野の譯注や論文が載っていることに多少の違和感を覚えた讀者もいたかも知れないと考えた。そのときの經驗を生かして、今回はなるべくある出土文獻——例えば「上海博楚簡」のような——や研究分野を特定せず、中國古代の出土文獻を扱っており、かつ一定の水準に達しているものであれば、何でも掲載できるように工夫したわけである。ところで、「秦楚文化」というと、今度は地域が特定されているのではないかといった疑問が起きそうだが、そういったことを意圖して付けたものでは決してないことをはっきりさせておきたい。これは今まで出土した資料が、多くの場合、秦楚兩地域に集中しており、出土資料研究もこの兩地域に関するものが大半を占めるという現状を反映しただけのことである。

次に、譯注の體裁の統一の問題があった。本創刊號所収の三つの譯注を一度繙けば分かるように、體裁がそれぞればらばらで全く統一されていない。譯注の場合、異なった篇であっても統一されていた方が讀者から見て読みやすいのは言うまでもない。したがって、編集責任者の立場からはどうしても體裁の統一を圖りたかったが、今回はそれが實現できなかった。實現できなかった理由はいろいろあるが、互

いに譯注の體裁を整えるための十分な議論や時間的な餘裕が殆どなかったことが最も大きい。そのような問題はあるものの、これら三つの譯注には、著者個個人の経験と個性とが存分に生かされていると、少し別の觀點から大目に見ていただければ幸いと思う。

そしてもう一つ、外字處理の問題があったことについてもふれておきたい。周知の如く出土文獻の譯注を作成する場合は、圖版の文字をなるべく忠實に再現するために外字を作ることは今やごく普通のこととなっている。まして楚系文字の場合はその大部分が JIS コードに無いものばかりのため、多くの外字が必要となる。さて最初私のところに三人の著者の原稿と外字ファイルが届いたときには、編集用のパソコンが Windows XP 搭載の最新のものであるので、外字處理は全く問題ないだろうと過信していた。ところが、それが大きな勘違いであることを、編集を開始して間もないうちに気づいたのである。何が問題かというところ、Windows XP 付屬の外字エディタが問題である。例えば、以前自分のパソコン上で外字エディタを利用して外字を作成したことがあるとしよう。そこに他のパソコンで同じ方法で作成した外字ファイルをリンクして開くと、自分が作成したものと他人のそれとが入り交じって、本文中の外字が正しく表示されないという現象が起きてしまうのである（Windows 2000 も同じ）。この問題の解決策はまだ見つかっておらず、そのため、本創刊號の編集作業は予定よりかなり遅れてしまった。Windows XP の仕組みはまだよく把握していないが、いずれにせよ、もしかすると我々のように外字處理を頻繁に行う者にとっては、Windows 98 のような舊バージョンの OS に戻って編集作業を行った方が、能率のアップや時間の節約に役立つかも知れない。

以上のことが今回實際編集を擔當してみてハードルとして感じたことである。今回感じたこれらの諸問題は號を重ねるにつれ、徐々に改善されることを願いたい。

最後に、本誌刊行のための編集會議のときは、谷中信一先生（日本女子大學教授）に場所を提供していただいた。また名和敏光先生（山梨縣立女子短期大學助教授）・宮本徹先生（放送大學助教授）・小寺敦氏（日本學術振興會特別研究員）・西山尚志氏（大東文化大學大學院修士課程）には、お忙しい中わざわざ足を運んでいただいた。特に編集作業に当たって、西山氏には、ご多用の中多大なるご協力を賜った。ここに記して感謝の微意を表したい。

なお、本創刊號の出版に際しては、停刊後若干残っていた『郭店楚簡の思想史的研究』の賣上金を使わせていただいた。そのご厚意にも心からお禮を申し上げたい。

（東京大學大學院專任講師）